

然阿良忠と諸行本願義

廣 川 堯 敏

浄土宗の第三祖然阿良忠は生涯をかけて諸行本願義との論争を展開している。しかし、その一方では良忠の『観経疏』解釈は、長西のそれときわめてよく一致している。それはどのような理由にもとづくものであろうか。

そこで、長西の『観経疏光明抄』と良忠の『観経疏聞書』とを比較してみると、良忠は明らかに覚明房長西の『光明

序分義聞書

覚明義有云^a淨影云今釈迦説如^b於過去一切仏説也釈迦之説諸仏説^c等云^d惣歟

となり、『聞書』の傍線a、bは、『抄』の傍線A、Bと全く一致する。つまり、良忠は『光明抄』の釈文を全面的に肯定して、自らの「物標教主」釈に転用している。さらに『観経疏略鈔』・『伝通記』の当該釈文においても同じく『光明抄』の釈文をより詳細に引用しているが、逆に「覚明義」の傍

印度學佛教學研究第四十二卷第二号 平成六年三月

抄』を参照して自著を撰述していることがわかる。

すなわち九項目にわけて、良忠がどのように具体的に『光明抄』を参照したのか、その参照の仕方を検討してみたい。

第一は明らかに覚明房の房名を記した上で引用する例（8例）である。すなわち、『序分義聞書』の当該釈文を『光明抄』と対比すると、

光明抄

疑云惣標之言通諸仏一歟如何答尔也……淨影観経義疏云……今釈迦説如^b於過去一切諸仏説^c故名爲^d如異説則非^e如説^f者是故曰^g如是^h

註は削除され、直接淨影の『観経義疏』からの引用という形式に改められている。

第二は「有云」として、長西の名を伏せて『光明抄』を引用する例（1例）である。すなわち、『序分義』の散善願行釈について『光明抄』と比較すると、

光明抄

六散善緣就二散善顯行緣中二事

疑云散善顯行有^レ何差別二歟答散善者惣^ニ善自体一顯行者此散善今別顯往生行云也意云此散善惣^ニ世間出世間十方淨土仏果修因通因今別一向為^ニ往生極樂一可^レ行^ノ之由自^ニ此文一顯云也

となる。つまり、『聞書』傍線bの「有云」とは『抄』の傍線Bと一致することから、『光明抄』の撰述者長西を指していることは明らかである。また散善顯行の散善を「惣」とし、顯行を「別」とする解釈（傍線a）は『抄』の积文（傍線A）に合致する。さらに『聞書』の傍線Cは「散善顯行」の訓点のつけ方が『抄』と異なるので、おそらく良忠の自釈である

光明抄

疑云大悲者能化歟所化歟如何答能化也^{云云}所化也^{云云}大悲境^{云云}故云大悲也

となる。『抄』の傍線bは長西の説であるが、良忠は長西以外の人師の説（『抄』の傍線C）を自説として『聞書』に引用している。

第四は『光明抄』と全く一致する积文の例（17例）である。

序分義聞書

何散善顯行云云難会是惣別異也意散善之中顯二三福之行云事也散善惣顯行別也有云散善広聖道淨土人天之業通故顯行狹限淨土之行一故故寛散善之中別顯淨土行一故散善顯行云也

う。とすると、良忠の自釈と「有云」とは思想的には同一の积義であって、ここでも良忠は長西の积文を肯定的に参照・引用している事実を確認することができる。

第三は『光明抄』の积文中、長西以外の人師の积文である「有云」を自己の解釈として引用する例（2例）である。すなわち、『抄』と『聞書』とを比較すると、

玄義分聞書

問今所^{云云}云大悲者能化所化云何耶答云云難云能化者上云云布慈雲於三界下云注法雨於大悲已上慈雲与法雨俱能化也三界与二大悲豈非三所化耶若云三所化者大悲之言極難消耶答今指三所化云云大悲也

まず『聞書』の大智論五善根积、法花経五乘积、勝鬘経四藏积はいずれも『抄』と一致する。

また、次の例では「取意」の言葉までそっくり借用している。

光明抄

慈恩アミタ經疏云反化鳥無心心所一屬依報取意

第五は『光明抄』所引の引用經論の孫引きの例（20例）で

光明抄

又西化者何等 歟答釈迦本国無勝土也涅槃經云從此西過二十四

二恒沙世界一故云西化也取意

とあるように、良忠は『抄』を参照して、四十卷本『涅槃經』第廿二卷の原文に實際にあたつて引用している。

第六は『光明抄』所引の問答内容と一致する例（5例）で

光明抄

(I) 一者孝養父母即有其四事

疑云就孝養有_レ四歟答不_レ尔有_二父母等之四_一云也以_レ何得_レ知_レ知_レ付三福業一以四分一_レ之故_レ惣此文章聊不審也然而文_レ次_レ第分明也故知一者孝養父母者只是_レ牒_レ經文_一也

(II) 四言深信因果乃至不得疑也等事

疑云開三福為四分一有_二何意_一歟答第三行福中發菩提心者安心也深信因果等者起行也為_レ分別_二之_一為四分一也

となる。つまり、『聞書』の問答は『抄』のⅠ、Ⅱの二つの問答を合わせたもので、傍線a、b、cはそれぞれ傍線A、

然阿良忠と諸行本願義（廣 川）

玄義分聞書

慈恩弥陀經玄贊云變化之鳥無心心所一故屬依報已上取意ある。すなわち、

玄義分聞書

四十涅槃經廿二云西方去此娑婆度四十二恒河沙等諸仏國土彼有_二世界一名曰無勝_一彼土何故名曰無勝一

ある。すなわち、『序分義』の疏文「一者孝養父母即有其中」をめぐる問答について『光明抄』と比較すると、

序分義聞書

一者孝養父母即有其四事

問此_レ積文_一□孝養父母之中有_二四事_一云似□三福之中第三之行福開二一_レ積即有其四標也□□者上具可_レ舉三福一何_レ舉_二孝養父母之一句_一標_二即有其四_一耶答一者孝養父母者言略也具可_レ舉三福_一也而讀_レ經引一句略_レ余也次即有其四者經合之意說三福_一積開可_レ四福_一旨存也於_二第三行福_一菩提心一誦誦勸進為_二二云_一四也

問_レ經合_レ積開_一各意如何答_レ經合_一事俱大乘法故也_レ積開_一事心行各別故也

B、Cにもとづいている。

第七は語句の解釈を借用する例（5例）である。すなわ

ち、体量と量性との區別について『聞書』と『抄』とを比較

光明抄

又体量与量性有^レ何別^ハ歟答真如等云惣^ニ標下体量量性者別^ニ申^ニ真如二德^ハ也謂^ニ体量者真如隨^ニ緣成^ニ有^ニ量法^ニ云此名^ニ隨緣真如^ハ量性者似^ニ隨緣成^ニ有^ニ量^ニ不變^ニ云量性^ハ也性不改義也此名^ニ不變真如^ハと、全く一致する。このほかにも良忠は無辺と辺体との區別、重昏と永夜との區別について専ら長西の語義釈を引用している。

第八は『觀經疏』原文の引用經論の典拠を調査するために

光明抄

經云一切衆生無不愛壽命等事

A 疑云指^ニ何經^ハ歟答十善戒經涅槃經也

B 十善戒經云一切衆生者無不愛身命過去來今仏一切智所說怒^レ已

C 可^レ譬勿^レ殺勿^レ行^レ杖若見^ニ殺生者^ハ如^ニ刀刻^ニ其心^ハ文

涅槃經云一切畏^ニ刀杖^ハ無^レ不^レ愛^ニ我命^ハ怒^レ已可^レ譬勿^レ殺勿^レ行^レ杖

文

とあるように、良忠は長西の出典調査をそのまま依用している。

第九は否定的に引用する例（3例）である。このような例

光明抄

疑云五乘中撰^ニ十聖^ハ歟答爾也尋云撰^ニ五乘^ハ何重云^ニ十聖^ハ歟答上

すると、

玄義分聞書

未^レ檢^ニ之但試解^ハ者鉢量者隨緣真如^ハ如^ニ量性^ハ者不變真如^ハ

『光明抄』を参照する例（3例）である。すなわち、『觀經疏』「序分義」散善顯行緣の疏文「經云一切諸衆生無^レ不^レ愛^ニ壽命^ハ」の典拠について両書を比較すると、

序分義聞書

經云一切諸衆生等事

B 十善戒經云一切受^ニ生者無^レ不^レ愛^ニ身命^ハ過去來今仏一切智所說

C 怒^レ已可^レ為^ニ譬勿^レ殺勿^レ行^レ杖若見^ニ殺生者^ハ如^ニ刀刻^ニ其心^ハ文

涅槃經十云一切畏^ニ刀杖^ハ無^レ不^レ愛^ニ我命^ハ怒^レ已可^レ為^ニ譬勿^レ殺勿^レ行^レ杖

行^レ杖

は少ない。たとえば、そのうちの第一の例は五乗の中に十聖を撰すか否かの問題である。すなわち、長西と良忠の、それぞれの釈文を対比すると、

玄義分聞書

A 而今五乘之言不^レ可^レ撰^ニ十地^ハ一也下別^ニ撰^ニ十地^ハ一故也問五乘云

指□□故別云三十聖二也五乘十聖意同也

となる。五乘に十聖を撰するか否かについて、長西は撰する
といい、良忠は五乗の外に十聖を別出しており、全く異つて
いる。『聞書』の傍線bは良忠自身の説を指しており、また
傍線Cは「抄」の傍線C（尋云）を指して「大錯」と断じ
ている。この釈文は長西の解釈とは異なる、良忠の独創説と
いえる。

第二の例は両三昧為宗の疏文をどのように解釈するかの間

光明抄

亦非は無時仏語等事

疑云上既云惣未言説今何云二非無仏語 歟答嘉祥云今圓放光答
因声問今色答也文此釈意声其問以色其説答云歟私云今文不
成云答也私云今無時仏語者雖云惣未言説言可有二仏言説而
或經家存略或訳者存略常事以何得知經上文云如来在昔之時恒
遣阿難一來慰問我応仏儀式尤可如 此若尔者我宿何罪等与提婆達
等為我広説等我今業生等 此等文一定可有二仏答也推此等意
釈三無時仏語等給也例如第 觀釈云但以三文略之故無兼為之心必有
也云

然阿良忠と諸行本願義（廣川）

不測其辺二十地云莫窮三其際何意 歟答五乘下云不測全
未見性也十地下云莫窮分証未窮也而世人無此分別而上五
乘撰二十地下十聖別重舉也云大錯

題である。すなわち、長西と良忠の、それぞれの釈文を対比
すると、

第二の例は『観経』序分の光台現国の経文について善導が
「総未言説上」といい、かつ「亦非は無三時仏語一也」と
もいうように、一見して矛盾する解釈を施していることに對
する会通釈である。すなわち、『光明抄』と『聞書』とを對
比すると、

序分義聞書

亦非は無時仏語也事

問從尔時世尊并提希文一上全無仏語以此上惣未言説釈如何
答有云明無言説 有言説 歟光台現国 開悟即当 仏語 故
也有云説法通六道光台現国色光之説法 故云 仏語 歟今云光台
之 悟無三文理共縦云 悟 光明不可可有云 仏語 又雖六
塵之説法名 仏語 限二口業之語声 何処余塵之説法云 仏語 耶
会之可有二義 一云有 仏語 者義推之釈 如来現深宮給時夫
人号泣申 己思 如来此時定可有 慰喻 也無 文事可 經
家之略 非出離之用 故也世尊依之義推 有 仏語 云也例如上如

となる。まず『聞書』傍線bの「有云」とは『光明抄』の傍

線Bの「私云」の釈文とよく対応する。『光明抄』における「私云」は長西その人ではなくて、長西の講述を筆受した弟子阿弥陀房を指すとする説があるので、良忠は長西の説と區別して、わざわざ「有云」と別出したのかもしれない。しかし、この「有云」を長西の説としても矛盾はない。『聞書』

傍線Cの「有云」とは『光明抄』の傍線Cと合致するので、明らかに長西その人の釈文を指している。この長西の釈文に対して良忠は「名^ト仏語^ニ限^ル口業之語声^ニ」と否定している。『聞書』傍線d「今云」ところが、長西の釈文を否定した後で、再び「一云」として長西の釈文を引用している。なぜならば、『聞書』傍線e、f、gは『抄』の傍線E、F、Gと一致するからである。このように、良忠には、数は少ないものの、長西の学説を批判し、独自説を主張している釈文を

来世尊在昔之時等之文^ニ二釈作中第二之釈父王在^レ禁已来數蒙世尊
遣^{シテ}阿難^ヲ一來^ニ慰^ム問^{ハス} 我^ハ二釈^ニ
一義云從^リ祇舍之伝説^ニ□□之悟^ヲ 故指^シ阿難語^ヲ云^フ仏語^ニ歟^ニ（以下略）

見い出すことができる。

以上、九項目にわたって長西と良忠、それぞれの釈文を比較してきた結果、良忠が『光明抄』を下数きにして自著『観經疏聞書』を撰述したことは明白となった。したがって、良忠教学と長西教学とは、表面上は論争し合っているかのように見えつつも、両者の思想基盤はきわめてよく類似しているといえよう。その理由はどこにあるのであるうか。その理由を解くカギは恐らく中古天台の宝地房証真の天台教学にあるのではなからうか。つまり、本覚思想を批判する証真の天台教学を共通の基盤とするからこそ、良忠教学と長西教学とはきわめてよく類似していると言い得るのである。

〈キーワード〉良忠、長西、諸行本願義、観經疏聞書、観經疏光明抄
(大正大学専任講師)